

ダニエルの書 - 第八十五番

預言の旅路を解き明かす：歴史の節目における神的なつながり

Jeff Pippenger

2024-02-18

1863年の反乱から126年後、1989年にダニエル書11章の最後の六節の封印が解かれた。その年に最初に明らかにされたのは、聖なる歴史における改革の流れの認識と、それらが互いに並行しているという啓示であった。続いて1992年には、最後の六節の光が解き明かされ始めた。これらの真理が公に最初に発表されたのは1994年で、その主題は改革の流れであった。1996年には『終わりの時』と題する雑誌が刊行され、そこではダニエル書11章の最後の六節が明らかにされた。

1996年はそのメッセージが正式化された年であり、これは1831年にウィリアム・ミラーのメッセージが正式化されたことと並行する道標である。ミラーのメッセージは審判の開始の宣言であり、ダニエル書11章の最後の6節は審判の終結の宣言であった。ミラーのメッセージの主題は、聖書に示された預言期間であった。ダニエル書11章の最後の6節の主題は、現代ローマ（偽りの北の王）であった。ミラーに示された方法論は、彼の「預言解釈の14の規則」であった。1989年に示された方法論は、改革運動の「行に行を重ねる」であった。

ミラーの働きには、世界で1260年のあいだ効力を持ってきた教皇制の伝統と慣習とは対照的に、神の言葉を権威あるものとして確立することが含まれていた。このため、ミラーのメッセージは1831年に初めて公にされた（こうしてミラーのメッセージは正式化された）。それは欽定訳聖書の刊行からちょうど220年後であった。フューチャー・フォー・アメリカの働きは、間近に迫る日曜法において、合衆国が教皇制の致命的な傷を癒やすうえで果たす役割を特定することであった。このため、『終わりの時』誌は1996年に刊行された（こうしてそのメッセージは正式化された）。それは1776年の合衆国の成立からちょうど220年後である。

それぞれの改革運動の主題を歴史的な参照点と結び付けていた「二百二十年」という認識は、2001年9月11日をはるかに過ぎるまで認められなかった。というのも、その日付に第三の災いが到来し、主がそのときご自分の民をエレミヤ書6章16節と17節の「古き道」へと連れ戻されたので、それまでは認められなかったからである。そこで「seven times」の光が再発見され、その光が発展するにつれて、二百二十という数がダニエル書8章13節と14節を結び付けるものであることが明らかになった。13節では預言的歴史の「chazon」の幻が示され、14節では「the appearance」の「mareh」の幻が示される。これら二つの節の結び付きこそが、ガブリエルがダニエルに教えるために来た内容であり、ダニエルは、終わりの時にその二つの幻の関係を理解する神の民を代表している。

13節の幻は「七つの時」（二千五百二十年）を表し、14節の幻は二千三百日（年）を表している。南王国ユダ（ユダ、エルサレムおよび聖所を表す）に対する「七つの時」は紀元前677年に始まり、エルサレムと聖所の回復を示す二千三百年は紀元前457年に始まっ

た。

二百二十年がこの二つの幻を結び付けており、二百二十という数は、異教主義と教皇主義の荒廃させる力による軍勢と聖所の蹂躪——それは散らしと神の憤りとして表されている——に関わる結びつきの象徴であると認識された。二百二十年は、聖所を踏みにじるサタンの業の幻と、同じ聖所を回復する神的な業の幻とを結び合わせた。ゆえに、二百二十年は聖なる結びつきを表す象徴である。

ミラライト運動が1863年の反乱で終わり、その126年後に第三の天使の運動が到来したように——これは両運動が「七つの時」（126）という象徴で結び付けられていることを強調している——、220年という期間は、1831年にミラーが聖書のメッセージを確立した出来事と、1611年の欽定訳聖書の刊行とを結び付けた。同じ期間は、アメリカの始まりとFuture for Americaを結び付けるとともに、アメリカの終焉をも指し示した。

1844年10月22日、契約の使者は、1798年（第一の憤りの終わり）から1844年（最後の憤りの終わり）に至る四十六年の間にご自身が建て上げた神殿に、突然来られた。その神殿への入場に先立って、「真夜中の叫び」の運動において聖霊の注ぎがあり、それはキリストのエルサレム凱旋入城によって予表されていた。これら二つの証は、終わりの日に真夜中の叫びの運動が繰り返されるとき、キリストが十四万四千人の神殿を建て上げておられることを確証している。十人の乙女のたとえの真夜中の叫びが成就する二つの運動は、互いに並行している。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

ミラー派（第一の天使の運動）の歴史は、1798年にダニエル書の封印が解かれたときに始まった神の力の顕現が、次第に高まっていったことを示している。1840年8月11日に黙示録10章の天使が降りてきたとき、その力はいっそう増し加わった。その後、1844年4月9日の第一の失望が訪れ、最終的には1844年8月12日に始まったエクセターのキャンプ集会での聖霊の注ぎへと導かれ、それは1844年10月22日まで大波のように全土に広がり続けた。

Future for America（第三天使の運動）の歴史は、1989年にダニエル書の封印が解かれたときに始まり、神の力が段階的に強まっていく顕れを示している。2001年9月11日に黙示録18章の天使が降りてきたとき、その力は増し加わった。そして2020年7月18日に最初の失望が訪れ、それは最終的に聖霊の注ぎ出しへとつながることになる。その働きは、ミカエルが立ち上がり人類の恩恵期間が閉じられるまで、野火のように地上に広がり続ける。

1844年10月22日、いくつかの預言が成就し、これにより、間もなく到来する日曜法の時に、いくつかの預言が再び成就することが示された。その預言の一つが、ハバクク書2章に示されている「幻の遅れ」である。ハバクク書2章は、第一天使の運動と第三天使の運

動の双方の経験を明らかにしている。両方の運動は、正しい聖書的方法論をめぐる論争に直面し、その論争は、その運動の代表者たちと、論争の過程で退けられつつあるかつての選民との間で行われる。

第一の天使の歴史の見張り人たちが守るべきメッセージは、最終的には1843年と1850年の二つの聖なる図表に表された真理（ミラーの宝石）の識別であった。論争の過程では、二つの敵対的な階級からの分離を画する失望が生じ、忠実な者たちに対して、より深い献身を求める呼びかけがなされた。

そしてハバククは、基礎的真理の吟味の過程に関わる二つの階級の区別を明らかにする。その吟味の過程は、1844年10月22日に終息した二つの階級間の論争を含むものであったが、まさにハバクク書第2章が終わるところで終わった。

しかし、主はその聖なる宮におられる。全地よ、その御前に沈黙せよ。ハバクク書2章20節。

主は突然ご自身のミラー派の宮に入られ、そのとき全地は沈黙を守るべきであった。反型の贖罪日が到来し、死者の審判が始まっていたからである。ハバクク書第二章の預言的歴史は1844年10月22日に終わり、イエスは常に、ある事の終わりをある事の始まりと結びつけて示される。聖所と軍勢が踏みにじられる二千五百年に関する幻と、聖所と軍勢の回復に関する幻という二つの幻の始まりは共に始まったが、二百二十年によって隔てられていた。そしてそれらが終わったとき、ハバクク書第二章二十節において、終わったものとして示された。

まもなく制定される日曜法に際して、いくつかの預言が成就する。それらの預言の一つは、ハバクク書2章に示されている、幻の遅れである。ハバクク書2章は、第一の天使と第三の天使の運動の双方の経験を示している。両方の運動は、正しい聖書的な方法論をめぐる論争に直面し、その論争は、運動の代表者たちと、論争の過程で選びから外されつつあるかつての選民との間で行われる。

第三天使の歴史の見張り人たちが擁護すべきメッセージとは、最終的に1843年と1850年の二つの聖なる図表に表された真理（ミラーの宝石）を識別することである。論争の過程で、二つの対立する階級の間に分離を生じさせる失望があり、忠実な者たちにはより深い献身が求められた。次いでハバククは、基礎的真理の吟味の過程に関与する二つの階級の相違を明らかにする。その吟味の過程は、二つの階級の間で論争によって表されていたが、間もなく到来する日曜法の時に完全に終わる。ちょうどそれは、ハバクク書2章が終わるその地点である。

しかし、主はその聖なる宮におられる。全地よ、その御前に沈黙せよ。ハバクク書2章20節。

主は突然、十四万四千人の神殿に入られ、そのとき全地は沈黙を守る。反型の大贖罪日が生者の裁きに至るからである。ハバクク書2章の預言的歴史は、間もなく到来する日曜法で終わる。そしてイエスはいつも、物事の終わりをその始まりと結びつけて示される。

生きている者に対する裁きは2001年9月11日に始まった。しかし、裁きは一つの過程である。その過程は神の家から始まり、やがて神の家の外にいる者たちにまで裁きが及ぶ段階に至る。ニューヨーク市の巨大な建物が倒壊したとき、エルサレムを行き巡り、教会で行われる忌むべき行為、またこの地で行われる忌むべき行為のゆえに嘆き叫ぶ者たちに印を付ける封印の天使によって象徴される裁きが始まった。間もなく到来する日曜法の時、キリストは十四万四千の神殿を建て上げる働きを終えており、滅びの天使たちがエルサレムに裁きを下す。

そのとき、十四万四千人が旗印として掲げられ、ダニエル書11章41節にあるエドム、モアブ、そしてアンモンの子らのかしらによって表される他の群れに対して、生者の裁きが始まる。

第一の天使のミラー派運動であれ、第三の天使の力強い運動であれ、改革運動の全史は、聖霊の注ぎで頂点に達する真理の漸進的な啓示を示している。聖霊の注ぎは終末の預言の焦点である。だからこそ、愚かなおとめたちには油がなく、賢いおとめたちは油を持っている。その油は雨である。

人は言う。「もし男がその妻を離縁し、彼女が彼のもとを去って他の男のものとなったなら、その男がふたたび彼女のもとに帰るだろうか。あの地は大いに汚されないだろうか。」しかし、おまえは多くの恋人と姦通した。それでも、わたしのもとに帰れ、と主は言われる。高き所に目を上げ、あなたが犯されなかった場所がどこにあるか見よ。あなたは道々で彼らを待ち受け、荒野のアラビア人のようにし、あなたの淫行とあなたの悪によってその地を汚した。それゆえ、雨は差し止められ、後の雨もなかった。あなたは淫婦の額を持ち、恥じることを拒んだ。今からでも、わたしに向かって「わが父よ、あなたはわたしの若い日の導き手です」と呼び求めないのか。エレミヤ書3:1-4

この箇所（そしてすべての預言者は終わりの日々について語っている）で、神はご自分の民が姦淫を行ってきて、ついには娼婦の額を持つに至ったことを指摘しておられる。終わりの時代の淫婦とは教皇権であり、額は意図的な決断を表す。終わりの時代の神の民は邪悪であるが、彼らが淫婦と同じ決断に至るところまで来ているにもかかわらず、神は最後の呼びかけをしておられる。彼らは第四世代によって表される品性を形成してしまい、エゼキエル書8章の第四世代に示されているように、太陽を礼拝する備えができてい

道徳の闇のただ中に、真の光が輝くべき時が来た。第三天使のメッセージは、額または手に獣またはその像の刻印を受けることに対して人々に警告しつつ、世界に向けて発せられている。この刻印を受けるとは、獣が下したのと同じ決定に至り、神の言葉に真っ向から反する同じ考えを主張することを意味する。この刻印を受けるすべての者について、神はこう言われる。「その者は、神の怒りのぶどう酒、すなわち薄められることなく神の憤りの杯に注がれたものを飲み、聖なる天使たちと小羊の御前で、火と硫黄によって苦しめられる。」レビュー・アンド・ヘラルド、1897年7月13日。

エレミヤは、終末時代の神の民がすでに娼婦の額をしていると指摘している。彼らは「邪悪」であるがゆえに、獣の刻印をまさに受けようとしている。先に引用した箇所で、ホワ

イト夫人は次のように続けている。

もし真理の光があなたに示され、第四の戒めにある安息日が明らかにされ、さらに日曜遵守には神の言葉のうちに何の根拠もないことが示されたのに、それでもなお、神が「わたしの聖なる日」と呼ばれる安息日を聖とすることを拒み、偽りの安息日にしがみついたら、あなたは獣の刻印を受ける。これはいつ起こるのか。あなたが、聖書には日曜日が普通の労働日以上のものであることを示す言葉が一つもないと知っていながら、日曜日には労働をやめ神を礼拝するよう命じる布告に従うとき、あなたは獣の刻印を受け入れることに同意し、神の印を拒むのである。もし私たちがこの刻印を額や手に受けるなら、不従順な者に宣告された裁きが私たちの上に下ることになる。しかし、生ける神の印は、主の安息日を良心に従って守る者たちに押される。

「神は、人の悪が地に甚だしく、心の思いのはかりごととはことごとく、いつもただ悪であるのをご覧になった。……地もまた神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていた。……そして神はノアに言われた。『すべての肉なる者の終わりが、わたしの前に来た。彼らのゆえに地は暴虐で満ちている。見よ、わたしは彼らを地とともに滅ぼす。』」彼らは、神が義なる民が楽しむために創造された地を汚したがゆえに、断ち滅ぼされることになった。

キリストはこう宣言された。「ノアの時代にあったように、人の子の日々にもまた同じことが起こるであろう。」そして、実際そのとおりではないか。日々の新聞を開けば、誰でも、犯罪の長い一覧-酩酊、窃盗、強盗、横領、殺人-を目にすることができる。ときには、自分のものではない金銭や財物を手に入れたいという人間の欲望を満たすために、家族全員が殺されることさえある。人々が神の命令を公然と無視しているために、この世はまさしくノアの時代のようになりつつある。Review and Herald, 1897年7月13日。

エレミヤは、太陽にひれ伏そうとしている終わりの時代の神の民を指摘しており、そのとき、彼は次のように述べている。「雨はとどめられ、後の雨はなかった。あなたは淫婦の額を持ち、恥じることを拒んだ。」終わりの時代の神の民のうちの「悪しき者たち」は後の雨を受けておらず、恥じることを拒んでいる。彼らの思いが絶えず悪に傾いてしまったからであり、それはノアの時代の歴史によって示されているとともに、エゼキエル書第八章の第二の忌むべきことにおける「想像の部屋」によっても表されている。

エレミヤは、終わりの時代における神の民の恥知らずの悪者たちに、「その時から彼らの若き日の導き手に向かって叫べ」と指し示している。アドベンチズムの若き日の導き手は、ハバククの二つの表と、そこに示された宝石であった。終わりの時代の神の民の悪者たちに永遠の死をもたらそうとしている邪悪から抜け出す唯一の望みは、1798年に「終わりの時」が到来したその初めに導き手であった神に叫び求めることである。

第一の天使または第三の天使の歴史における問題は、あなたが後の雨を受けるかどうかである。後の雨は、諸国民が怒った2001年9月11日に始まった。

その時、救いの働きが終わろうとしている間に、地上には患難が臨み、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが下り、第三天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが

注ぎ出される時期に堅く立てるよう聖徒たちを備える。『初期の著作』85.

「後の雨」は「潤い」とも呼ばれ、諸国民が怒ったときに始まり、その時「救いの御業」は閉じに向かい始めた。黙示録7章の四人の御使いは、十四万四千人への封印が成し遂げられるまで四つの風を押さえており、またエゼキエル書9章では、その働きは、エルサレムで行われている忌むべきことのために嘆き叫ぶ者たちに御使いが印を付すこととして表されている。2001年9月11日、御使いたちは、十四万四千人の額に印を付すという終わりの働きを開始した。

第三天使の締めくくりの働きは、後の雨の注ぎ出しの最中に成し遂げられるが、これはまた「リフレッシュ」とも呼ばれ、それ自体がメッセージである。

彼は彼らに言った。「これは、あなたがたが疲れた者を休ませることのできる休息であり、これは憩いである。しかし、彼らは聞こうとしなかった。」イザヤ書28章12節

イザヤ書で彼らが聞こうとしないのは、どもる舌によって告げられるメッセージであり、人々を試すメッセージであって、「line upon line」という方法論を体現している。

しかし、主の言葉は彼らにとって、「戒めに戒め、戒めに戒め、定めに定め、定めに定め、ここに少し、そこに少し」となり、彼らが出て行って、うしろに倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕らえられるためであった。それゆえ、エルサレムにいるこの民を治める嘲る者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたはこう言ったからだ。「わたしたちは死と契約を結び、よみと協定を結んだ。押し寄せる災禍が通り過ぎるときも、それはわたしたちに及ばない。なぜなら、偽りをわたしたちの避け所とし、虚偽のもとに身を隠したからだ。」イザヤ書 28:13-15

主の御言葉、すなわち安息と憩い（後の雨）のメッセージであって、彼らを「行って、うしろに倒れ、打ち砕かれ、罨にかかり、捕らえられる」ようにさせるその言葉は、「エルサレムにいるこの民を治めるあざける者たち」に与えられている。エルサレムは、嘆き叫ぶ者たちに天使が印をつける場所であり、委ねられた務めを裏切った長老たちが最初に倒れる。

「行われているすべての忌まわしいことのために嘆き叫ぶ者たち」の上に、救いの印が押された。いまや死の天使が出て行く。エゼキエルの幻では、殺戮の武器を持つ人々によって表されており、彼らには次の命令が与えられる。「老人も若者も、処女も幼子も女も、ことごとく打ち殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」預言者は言う。「彼らは家の前にいた年老いた者たちから始めた。」（エゼキエル9:1-6）滅びの業は、民の霊的な守護者であると自称してきた者たちの間から始まる。偽りの見張り人たちが最初に倒れる。哀れむ者も容赦する者もない。男も女も、処女も幼子も、ともに滅びる。『大争闘』656頁。

1989年に起こった知識の増加については、次回の記事で引き続き取り上げます。

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない。まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼らの忌むべき行いを喜んで喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨

ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」

イザヤ書66:3、4; テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12.

天の教師は問いかけた。「実際には世の方策に従って多くの事柄を取り計らい、エホバに対して罪を犯しているのに、正しい土台の上に建てており、神があなたの行いを受け入れておられるという見せかけにまさる、心を惑わす強い迷いがほかにあるだろうか。ああ、なんと大いなる欺き、魅惑的な迷妄であることか。かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違え、自分は富み、財を増し、何一つ必要がないと思いつみながら、実のところはすべてを必要としているとき、その迷いは人の心をとらえてしまうのだ。」『証言』第8巻、249、250頁.